

文化・芸術はコロナ禍からの再生への起爆剤 「もつと、市民の日常に!!」

ザ・シンフォニーホール総監
滋慶学園グループ総長

浮舟 邦彦氏



教育事業を展開して

にして います。

——実際に多彩な学校を経営されていますね。

私たち滋慶学園グループが掲げてきた職業教育は、専修学校制度が施行された1997年、厚生省(現厚生労働省)認定の歯科技工養成校から始まりました。以来46年、産業界や時代の要請に応え、実業教育・人間教育・国際教育という建学の理念のもとで、文化・芸術からIT、医療・福祉の分野で人材を育成してきました。現在、大阪にある臨床工学技士を育てる滋慶医療科学大学や「医療の質と安全」を研究する同大学院をはじめ、専門学校、高等学級、高等専修学校などで人材養成に取り組んでいます。

——職業教育にとって「教養」はどうね。

もともとクラシック音楽が好きで、ザ・シンフォニーホールの演奏会にもよく足を運んでいました。また文楽劇場にも毎年通うようになりましたが、回を重ねるごとに文楽が身近なものになり、楽しみ方も深まつてきました。若い人们にできるだけクラシック音楽や文楽、美術などに日常的に親しんでもらいたいですね。

との強い思いにかられました。

私は「職業人教育を通して社会に貢献する」との思いで大阪からスタートして現在、全国で82校の専門学校などを運営していますが、これも「新たな形の社会貢献事業」になればと考えています。

——コロナ禍でこの3年、大変でしたでしょうかね。

私が運営されるきっかけは、浮舟邦彦さん(滋慶学園グループ総長)はいま、クラシックをはじめ大阪の文化芸術が市民の日常となることでそれが経済をも牽引していく、と新たな飛躍に向けて取り組んでいます。浮舟総監に、その思いをお聞きしました。

(聞き手・池田知隆)

ザ・シンフォニー・ホール開設40周年
を迎えて

——運営されるきっかけは。

私がホール運営の相談を受けたのは、2012年の初め、東日本大震災からの復興への道筋が見えだしたころでした。大阪でも行財政改革で、文化・芸術関連予算が大きく減り、いろいろと問題を抱いていました。この「残響2秒」を誇るホールは、カラヤン、バーンスタインを始め、世界中の巨匠から絶賛された日本の文化遺産であり、関西のクラシック界において必要不可欠な存在です。なんとかして、ありのまま音楽の殿堂として継続したい

2020年はまる3ヶ月間、ホールの閉鎖を余儀なくされました。高齢者のファンのみなさんのなかには、ホームページをご覧になられなかつたり、メールを使っておられなくて、急な公演予定の変更などをスムーズに伝えらなかつたのが一番困りましたね。

その一方で、音楽のありがたさをあらためて気づかされました。それまで当たり前のよううに文化・芸術の力に浴していくことを思い知らされました。長引く感染対策で入国できない外国人プレイヤーがたくさんいましたが、その反面、彼らの代役として登場した素晴らしい日本人演奏家との出会いもありました。コロナ禍が招いたさまざま「分断」を乗り越え、これから的新たな「出会い」を楽しみ



ザ・シンフォニー・ホールにて浮舟総監

これまで産業界などの期待に応え、国家資格の取得を目指すなど実学教育や産学連携教育で即戦力を身につけ活躍できる人材、また「社会人としての基礎力」次の一步を踏み出す力やチームで働く力、課題を解決していく力などを身に付けた人材が求められています。そのためにも人間力を培う教養は重要です。

——暮らしを豊かにする文化も大切ですね。

私もホー

関西の文化力向上に向けて

——大阪の課題については。

大阪にはもともと、起業家による寄付文化やファイナンスロビー精神がありました。私が運営を受けたとき、クラシック音楽は行政からの補助が少ない大阪では生き残れないのか、担当者といろいろ話し合いました。これまで、多くの課題に直面したときに私は「アイディア」「チャレンジ」「イノベーション」を大切にしてきましたが、なによりも、自立、自営していくことが基本だと思っています。まずそこから、未来へとつなないでいかなくてなりません。



世界中の音楽家が足跡を残す舞台裏

2014年から具体的に運営に着手しましたが、まず子どもたちの情操教育に資するプログラムとして0歳児が入場できるコンサートや小学生向けのコンサートを企画しました。それまで6歳未満の幼児はホールに入れなかつたのです。子どもにとつてお母さんといつしょに音楽を楽しむことが大切です。

さらに光、映像、プロジェクトマッピング(立体物に映像を投影する技術)を使った演出を採用しました。ホール独自の弦楽合奏団の創設、器楽、生音にこだわったビッグバンドを立ち上げたり、関西の4つのオーケストラの連携によるコンサートで観客増員を図りました。課題に対し「考え」「行動していく」ことが必要だと思っています。

——次々と新企画を実現されてこられたのですね。

おかげでザ・シンフォニー・ホールの会員誌「シンフォニア」の会員も当初の1万人から4万人以上に増えました。観客数も8年前の年間12万人からコロナ禍に入った2019年には36



小学生のための自由研究ノート

万人になりました。その後、公演回数が減り、入場者数の制限もあって急減しましたが、今年度はなんとか30万人まで回復出来そうです。

夏休みには小学生の自由研究のために親子定期演奏会も開きました。今年で8回目。今回のテーマは「200年前のヨーロッパの音楽と絵画」。ロマン派音楽の巨匠と、同時代に活躍した画家とその作品をリンクさせながら、芸術の魅力に迫っていく試みです。子どもたちがスクリーンに映し出された絵画と音楽の演奏を楽しみながら感想を記入できる研究シートもプレゼントしました。これからも、子どもたちが「ああ、楽しかった」と思えるようなイベントを企画していきたいですね。

——関西経済同友会の「文化の力委員会」委員長を務めておられますか。

これまででは文化・芸術は地域の経済力によつて支えられているといわれていました。しかし、文化・芸術は地域経済を活性化させ、牽引していくものでもあります。これからは文化・芸術と経済が両輪となつて地域の格の向上を図つていく必要があるでしょう。

このシンフォニー・ホールがあることでこの周辺地域は文化ゾーンになり、心豊かな生活空間が生まれています。大阪を日常的に音楽や芸術・文化を楽しめる街にしていきたいですね。

——これから抱負を。

2025年には大阪・関西万博が開かれます。大阪だけでなく、京都、奈良を含めて関西全域で文化・芸術の振興に努め、多くの人々の心の健康の向上に貢献していきたいですね。

ザ・シンフォニー・ホール

クラシック音楽にはもっとも良いとされる「残響2秒」の実現した日本初のクラシック音楽専用ホール。1982年に開設され、世界のトップオーケストラが何度も来日公演しているほか、在阪のオーケストラの定期演奏会場として定着している。客席がステージを囲むアリーナシアター形式で、座席数は1704。

〒531-8501 大阪府大阪市北区大淀南2-3-3。電話06-6453-1010

浮舟邦彦(うきふね・くにひこ)

1941年生まれ。関西学院大学法学部卒。現在、滋慶学園グループ総長のほか日本医療秘書学会理事長、米国フロリダ州立ウエストフロリダ大学教育名誉博士、米国コロンビアカレッジシカゴ教育名誉博士、韓国啓明大学校教育名誉博士、関西経済同友会「文化の力」委員会委員長としても活躍中。



会員誌「シンフォニア」